

# 大腸がん診断後の禁煙について

Ordóñez-Me 氏らは、大腸がんを発症した 1 万 2,414 例の喫煙行動が予後に及ぼす影響についてメタ解析を行いました。非喫煙群に対する喫煙歴（現在は非喫煙）群、現喫煙群のハザード比（HR）はそれぞれ 1.12(95%CI 1.04~1.20)、1.29（同 1.04~1.60）でありました。すなわち、なんらかの喫煙歴がある患者では、喫煙歴がない患者に比べて、死亡リスクが高い結果となりました。



また、大腸がんの診断後も喫煙していた患者（現喫煙群）と比べて、禁煙した患者（喫煙歴群）では、死亡リスクが22%減少（10年未満HR 0.78、95%CI 0.69~0.88、10年以上HR 0.78、95%CI 0.63~0.97）、大腸がん死のリスクも24%減少していました（10年以上HR 0.76、95%CI 0.67~0.85）。すなわち、大腸がん診断後に禁煙した場合には、喫煙を続けている場合に比べて予後が改善されていました。

